大賞［高校生の部］

日本文化を総合的に体感できるものとして、「日本旅館」そのものをテーマパークとして海外に輸出するというユニークな発想が、絶賛されました。

世界へはばたけ日本旅館

――日本文化をまるごと輸出せよ

清教学園高等学校２年
伏野 里保
ふしの りほ

日本人は、多彩な感性をもっている。「わびさび」に代表されるように、簡素な中に美を見出し、静寂に趣を感じる。また、染物の微妙な濃淡の違いを味わう。これは、日本独自の文化である。そんな日本の文化の良さを、どうしたら海外の方に伝えられるのか。一番手っ取り早いのは、日本に来てもらい、日本の情緒をその目で見て味わってもらうことだ。私の学校に来る留学生は、何事にも好奇心旺盛で少しでも日本の文化を掴もうとしている。私が高校1年の時に友達になったドイツ人の女の子は、帰国しなければならなくなった時、お別れの挨拶で、「もっと日本にいることができたら、もっといろんな物が見られたのに。」と言っていた。一般の外国人がたびたび来日できるなら、日本の素晴らしさは、世界中に広まるだろう。しかし、日本に旅行するのは、気軽な事ではない。日本は円高であり、また、インフルエンザなどの伝染病がはやると、誰しも海外旅行は避ける。実際、その影響で平成21年度の外国人入国者数は約758万人で前年と比較して約156万人減少している[1)]。このままでは、幅広い外国人に日本の良さを知ってもらえない。そこで、私は、海外に旅館を建てることを提案する。

第1章
旅館につまった日本文化

旅館は、日本文化を凝縮したものと言っていい。

1つ目は、畳の部屋である。外国では、普通、靴を履いたまま部屋に入る。入口で靴を脱ぎ、畳の上に座ってくつろぐことは、それだけで十分外国の方の目に新鮮に映る。ホテルでは、くつろぐ場所は椅子やベッドの上などで、常に目線が高い位置にある。それに対し旅館では、畳に座ることで常に床に近い、低い目線になり、その結果上に広がる空間が広く見え、解放的な気分が味わえる。旅館につきものの座椅子も、目線を下げるのに効果的だ。

2つ目は、布団だ。布団は、出し入れが可能なので、昼間は部屋を広く使える点が便利だ。また、晴れた日には、外に布団を干しておくのもよい。日の光を浴びた布団は、ふかふかで寝心地がよい。これは、ベッドのマットレスでは、なかなか味わえない体験である。

3つ目は、庭である。私の祖父母の家は、小さいが縁側も庭もある。夏に遊びに行った時、そこで線香花火をして遊んだ。庭にいると、時が過ぎるのを忘れ穏やかな気持ちになれた。庭は、手入れが必要であり、旅館側にとって確かに面倒だ。しかし、普段の効率的かつ機械的な慌ただしい生活を忘れ、心に平安と潤いをもたらしてくれるものでもある。日本の庭は、情緒あふれるものがたくさんある。例えば、池を造って色とりどりの鯉を放つのは風流である。また、日本の庭は苔を活かして情緒をただよわせることが得意だ。石灯籠などに苔がついているのは、趣があってよい。夜には灯籠を灯し、眠る時には障子ごしにほのかな明かりを愉しむのもいいだろう。縁側のある部屋であれば、風鈴をつるし、涼やかな音を聴きながら庭で涼むことも、日本の文化と言える。

このように、旅館では、外国にいながらにして、日本の文化を満喫できる。そして、微細な日本人の感性を外国人に知ってもらえる。忙しく、時間に余裕の無い人でも、気軽に日本文化に浸れるのだ。よって、海外に旅館を建てることは、有効である。

第2章
おもてなしの心を提供する

旅館は単にモノや施設だけを提供する場ではない。むしろ、こまやかな配慮で客をもてなすことが、旅館の最も重要な部分である。日本文化には、「おもてなし」の精神がある。相手の立場に立ってものを考え、客の期待にこたえる。日本のきめ細かな「おもてなし」は、海外で大きなビジネスチャンスになるだろう。

「おもてなし」をする上で欠かせないのが、女将の存在である。女将は、ホテルマンとは違った接客をする。まず、和室をととのえる。季節よりも少し早めの掛物を掛け、花を活ける。部屋に合うように、また客の満足のいくようにするこれらの仕事は、女将の腕の見せ所である。

次に、客に見せる所作である。着物を着た女将の所作は、優雅で美しい。例えば、正座をした状態で襖をあけ、深く礼をする。これは、畳だからできることで、日本独特の礼儀作法だ。心のこもった所作は、見ているだけで気持ちのいいものである。

そして、一番大切なのは、女将が客の求めているおもてなしをくみ取る事だ。例えば、客の体調や好みを知り、料理の内容を可能な限り変えることである。また、客が箸をつけていない料理があれば、声をかけて対処することだ。客が口に出さずとも、気持ちをくみ取ってサッと行動してもらえるのは、客にとって大きな安心感となる。

また、旅館のおもてなしで特徴的なのは、仲居さんが部屋に食事を運ぶことだ。ホテルでは、ルームサービスはあるが、普通レストランで食事をとる。レストランでは、大抵の場合、部屋着ではなく服を着なければならない。湯上りでせっかくくつろいだのに、食事をするために着替えなければならないのは面倒だ。また、他の客の目を気にしなければならない。小さい子供をつれている人は、子供が他の客の迷惑にならないように注意する必要があり、食事を十分に楽しめない。それに対し部屋で食べる食事は、その点を気にする必要がない。部屋で浴衣姿でくつろぎながら、家族や友人と水いらずで食事を愉しめることは、旅館の醍醐味である。

ところが、このようなおもてなしの中で、外国人には適さないものもあるかもしれない。例えば、せっかく日本文化を体感しに来たのだから、仲居さんまかせでなく自分でお茶を淹れてみたい人もいるだろう。ここで忘れてはならないのは、旅館は外国人にとって日本文化を味わう場であることだ。だから、過剰なおもてなしで、かえって居心地の悪い思いをさせてはならない。現場では、日本流のおもてなしを押し付けるのではなく、柔軟な対応が求められる。

第3章
海外で期待される展開

このように、旅館は、日本文化をまるごと体感できる施設である。きめ細かな「おもてなし」と文化を武器に、日本旅館は、海外で新たな市場を開拓できるだろう。

私は、日本から遠い国、例えばヨーロッ

パへの進出が日本旅館普及への鍵となると考える。平成21年度の外国人入国者数では、アジアからが約547万人であるのに対し、ヨーロッパが約86万人である[2)]。つまり、日本から距離のある国の人は、足が遠のいてしまうのだ。そうした国に旅館を建てることにより、日本への意識が高まることが期待できる。結果、旅館を訪れた人が「日本ってどんな国だろう」と興味をもち、日本を訪れることにもつながるのだ。

海外建設にあたっては、旅館は単なる宿泊施設ではなく、ある種のテーマパークとしての価値が求められる。なぜなら、海外で旅館に泊まることは、それ自体が「日本への旅行」だからである。では、海外で旅館の価値を高めるには、どうすればよいか。例えば、宴会場で日本の伝統芸能を紹介する催しを開くことだ。歌舞伎や浄瑠璃などは、言葉が分からなくても視覚的に楽しめるのでよい。また、茶室を造って外国人に着物を着てもらい、お茶を愉しむのもよい。

日本旅館の伝統を尊重しつつ、海外の方に満足してもらえるような付加価値をつける。これが、日本旅館が海外で生き残る秘策である。

文中注

1）法務省入国管理局「法務省：平成21年における外国人入国者数及び日本人出国者数について（確定版）」法務省ホームページ
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_100312-2.html（参照2010-8-27）

2）法務省「第2表　国籍（出身地）別新規入国・再入国別外国人入国者数（平成21年）」法務省ホームページ
http://www.moj.go.jp/content/000033385.pdf（参照2010-8-29）